

話芸の力

先 日落語を聴きに行く機会が続きました。

飛行機の中で落語を聴く事はあっても、落語を聴きに寄席や落語会に行く機会は我が人生にはありませんでした。それも立て続けに3回も行くこととなりました。

飲食店経営者の勉強会で落語会を開催して頂きました。普段聴いていた録音の落語とライブで聴く落語とは迫力がまるで違うのであります。羽織をバツと脱ぐしぐさ、扇子をお銚子や橋に見立てた仕草などを見てみると、落語ってえのは話芸だけではなくて佇まいも芸になっているんだねえと感心してしまふのであります。

また、東京生まれの東京育ち、日本橋のおじいちゃま達と酒を酌み交わしておりますと、言葉が江戸弁訛りになってしまい、周囲の人々からかわれる事がある私にとっては江戸っこ氣質丸出しの落語言葉は妙に心地よく感じるのでした。

ある日落語家さんとお話をする機会に恵まれました。どうも寄席での仕事は1日1本しかないため、ほかの仕事も入れる事が多いようです。面白い営業はどんなところだったのでしょうか。

文 木村安兵衛

text by Yasube Kimura

なんと自衛隊での話し方研修という話を伺いました。大方隊員の方々の慰問落語だが、落語会では予算が下りないから勉強会という名目にしたのかな？等と不謹慎な想像をしておりました。しかし実態は全く違うのであります。自衛隊の方々は多くの被災地に救済活動で行くのだが、被災した方々とのコミュニケーションのとり方にご苦労なさっているということらしいのです。

そういえば私も同じ日本語でも言葉の違いに悩んだ事が最近ありました。関西圏にパン屋を出店した時の事でした。東京から腕つききのパン職人を連れて意気揚々と京都に乗り込みました。ある日、元気のない職人から悩みを打ち明けられたのです。「応援で来ているチーフが怖すぎて仕事場に来れない」。しかし現場を見ているチーフの職人からはスタッフを罵倒したり、脅かしている素振りは見受けられません。どうやら仕事の注意や指示が共通語では冷たく厳しく聞こえてしまうという事だったようです。みんなで話し合った結果、下手でもいいので関西弁もどきを勉強しようということになり一件落着いたのでした。

言葉というものは時として、発した

人と受け取った人で違う事を想像してしまう事があります。高等表現力を磨くという事は、チームでパンを焼いてお客様に提供するパン屋という仕事にはとても大切な事であるにもかかわらず、見落とされがちな事でもあります。育った環境や経験した事が違い頭の中を覗くことができない以上「解っているだろ？」「察しろよ」は通用しないのであります。

話芸を磨きコミュニケーション能力を高める事は、すぐスタッフをやめてしまう日本の風潮を打破できる必須スキルになるのだろうと確信したのであります。

Profile

1969年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、千代田生命保険相互会社に入社。その後アメリカで唯一のFDA(米国食品医薬品局)研究機関である米国立製パン研究所へ留学、ベーキングサイエンスを研究する。ニューヨーク、フランスにて修業を積んだ後、その腕前と経営センスを見込まれ、エリック・カイザーの在日パートナーとして、2000年に株式会社ブルーランジェリーエリックカイザージャパンを設立。2001年メゾンカイザー1号店として東京・高輪に店舗をオープンし、2017年現在29店舗を数える。

